

ゼミナールの教育効果とその実践 —日本大学商学部におけるゼミナールを事例として—

関谷 喜三郎*

日本大学商学部

Educational Benefits of Seminars : Using the Seminars at Nihon University College of Commerce as an Example

Kisaburou SEKIYA

College of Commerce, Nihon University

本報告は、日本大学商学部において、少人数教育としてのゼミナールの教育効果に関するさまざまな工夫とその実践から得られた知見をまとめたものである。商学部における1学年10名前後の学生から成るゼミナールは文字通り少人数教育を実践する場である。そこには、日常のゼミ活動を通じて学生が自ら考え行動するという「自主創造」を体現する場がある。ただし、学生がゼミナールの活動から創造力を養うことができるようになるためには、ゼミの活動の中にそれを実現するための「仕掛け」「工夫」が必要である。この報告では、授業としての「演習」だけでなく、合宿、学内・学外の論文発表大会への参加等を含めて、さまざまな場面を通じて、ゼミ生の能力を発展させるための実践例が示されている。

This report summarizes the findings on the educational benefits obtained from the activities of the seminars at Nihon University College of Commerce. In the Faculty of College of Commerce, a seminar consisting of 10 students in the one grade is literally a place to practice small-group education. Through daily seminar activities, students can embody self-creation in their thinking and actions.

However, in order for students to be able to develop their creativity, it is necessary to have devices and ingenuity to help them in realize their potential. In this report, not only class exercises, but also practical examples for developing the abilities of seminar students through various situations, training camps and participation in thesis presentation competitions inside and outside the college, are presented.

キーワード：少人数教育, 質問票, 論文作成, 古典の購読, 合宿, 5分前行動, サブ・ゼミ, 合同ゼミ

Keywords:

Small-group education, questionnaires, dissertation writing, classic subscription, training camp, 5minutes before-actions, sub-seminars, joint seminars

はじめに

大学教育の満足度調査において学生が高い満足度を示すのは少人数教育である。大教室での講義に比べて、学生自身が授業に参加したという実感がもてることで満足度の向上につながると考えられるが、それは学生が授業中に発表、討論、設問への解答を通じて自ら授業にコミットできるからである。授業で何を学んだか

*E-mail: sekiya.kisaburou@nihon-u.ac.jp

投稿：2021年11月2日 受理：2022年2月2日

ということ以上に何らかの形で授業に参加したことが満足度を高めることになる。

商学部の授業では専門科目の多くが大教室での講義となる。そこでは、学生は授業を聞くだけという形になる場合が多く、積極的に参加したという実感が持ちにくい。そうした中でゼミナールは、専門科目に関する教育を少人数で行うことができる貴重な機会であるといえる。

商学部におけるゼミナールは2年生からの選択科目であり、学生が関心をもつ内容に応じてゼミを選択することができる。ゼミナールは2年生、3年生、4年生の3年間であり、同じ先生の下で特定の領域について専門的に学ぶことができる。多くのゼミが定員10名程度であり、文字通り少人数教育を実践することができる。選択科目なので、学生が学びたい内容を自ら選択することができるために、目的意識を持ってゼミに入ることができる。受け入れる先生も専門分野についてやる気のある学生を受け入れることができる。

ゼミナールは少人数教育の実践の場となるが、それを生かして教育効果を上げ、学生の満足度を高めるためには、さまざまな場面で学生の積極的な参加を促す仕掛けや工夫が必要である。本稿は、ゼミナールにおける教育効果を高めるための仕掛けや工夫とその実践についての報告である。

1 ゼミ活動の内容：活性化の工夫

ゼミナールは、2年生から始まり、3年生、4年生と3年間に渡り継続する。ゼミの学習は各学年とも演習という名目で週1回行われる。これを本ゼミと呼んでいる。授業回数は年間30回であり、授業時間も1回1時間半と通常の科目と同じである。修得できる単位は、2年生と3年生が各4単位であり、4年生は卒業論文の作成により6単位が与えられる。したがって、ゼミ3年間で14単位の修得が可能である。

(1) 2年生のゼミ活動

2年生は専攻分野に関する基本的な文献を学ぶ。はじめは入門テキストを指定し、1回1章を目安にして読んでいく。順番にレポートする学生を決め、その学生がその週にやる章の内容を要約したレジュメを作成し、当日参加者全員にそのペーパーを配布して報告を行う。その後、事前に配布してある質問票にしたがって、レポーターが司会者となって内容を検討していく。そこには、ゼミの授業に全員が参加できるように、次のような仕掛けがなされている。

- ① 当日検討すべき内容に関して、事前に3から5問の質問を用意し、その内容を参加者全員が調べてくる。
- ② 質問内容はその日に行われる章を読んで理解できなかったことや内容に関してゼミで討論したいことである。各自が提出したものをゼミ生みんなと相談して5問以内に絞り込んでおく。
- ③ 提出された質問はゼミの3日前までには各自に行き渡るようにするので、当日までに予習が可能になっている。予習してあるので、ゼミの時間中、各質問に対してゼミ生からの発言が途切れることがない。
- ④ その日に学習する範囲や課題が決まっても、議論のための準備ができていなければ、先生の説明を聞くだけか、特定の学生が意見を述べるだけになる。
- ⑤ 学生に積極的な参加と発言を促すためには、仕掛けが必要になる。それが、事前に議論する質問を決め、それを前もってゼミ生全員に知らせておくということである。

司会者の進行に従って、1問について15分から20分議論し、質問ごとに教員がコメントを行う。事前に準備があるので議論は活発となる。これにより、ゼミ生は毎回ゼミ活動に参加したことを実感することができる。内容的にも、相手の意見を聞きながら、討論することができるので、人前で発言する訓練を積み重ねることができる。

(2) 3年生のゼミと役職担当

3年生はより専門的な書物を用いて2年生と同様な形式でゼミ活動を行う。そこでも、2年生のときと同じように、質問への回答準備、レジュメの作成、報告、司会進行、意見発表、討論等を行うことにより、テキストの内容を理解するだけでなく、基礎的な学習能力を身に着けることができる。

3年生のゼミ活動が2年生と異なるのは、ゼミ活動を行うための役職に就くということである。ゼミ長、サブ・ゼミ係、渉外担当、会計担当、機関紙担当の5つの役職がある。

- ① ゼミ長はゼミのキャプテンとして、ゼミ活動全体を統括する。
- ② サブ・ゼミ係は2年生のサブ・ゼミを指導する。
- ③ 渉外はゼミのすべての行事の遂行責任者である。最も大きな行事は春・夏の合宿であるが、ホテルの選定、予約、事前の下見から当日の宿泊まですべてのことに責任をもつ。
- ④ 会計は合宿費の支払いを含めてすべての行事の金銭出納に責任をもつ。
- ⑤ 機関紙は、ゼミで2年に1回の割で発行している機関紙の編集、印刷に責任をもつ。OB・OGに機関紙への原稿依頼も行う。

ゼミ活動は、各学年の本ゼミだけでなく、春・夏合宿、前期・後期の納会、OB会の開催、その他さまざまな行事を伴うが、それらの遂行はすべて3年生に任されている。複数の卒業生から、ゼミでの役職の経験が社会に出てから役に立ったとの意見が寄せられている。

(3) 4年生前期：新聞の購読

4年生には就職活動という一生を左右する大きなイベントがある。まずはこれに全力投球する必要がある。また、卒業論文の作成というゼミ活動3年間の総仕上げともいえるべき仕事がある。

就職活動も卒業論文も4年生のゼミ活動の中心となるような大きなイベントであるが、実は時間的にはそれほど多くの時間を必要としない。したがって、こうしたことを理由にして4年生の毎週のゼミ活動を実質的に休止すると、4年生の大事な時間を無為の内に過ごすことになりかねない。就職活動をしながらも、毎週のゼミを充実させる可能性はある。前期のゼミ活動の事例として新聞を使った討論がある。

- ① 就職試験対策も兼ねて4年生の本ゼミで毎週新聞を読む。4年生の前半は就職活動優先ということで毎回全員参加というわけにはいかないが、ほとんどの学生は参加が可能である。
- ② 毎回、3人ぐらいのゼミ生にその週の新聞から話題となった記事をコピーしてもらい、それを参加者に配り、その報告を聞きながらみんなで内容を検討する。
- ③ 主に政治、経済の記事を取り上げるが、社会面のトピックでもよい。これにより、現代の社会のことに関心を向けることができるとともに、3年生までの討論形式を継続することができるメリットがある。これにより常に人前で自分の意見を発表し、討論するという機会を持ち続けることができる。
- ④ 就職の面接試験対策としても、時事問題への関心を高めておくというメリットがある。
- ⑤ 就職活動のために実質的にゼミ活動を休止すると、4年生になってゼミ生間の交流が途絶えることになるが、毎週ゼミがあり、就職活動と重ならない限りそこに参加できれば、そこが気分転換の場となり、仲間との情報交換の場ともなる。

(4) 4年生後期：古典を読む

4年生の後期になると就職活動も終わり、単位もほぼ修得できているので、学生は自由な時間を手にすることができる。ゼミ生も卒業論文の作成を残すだけとなる。実は、ここに大学生活最後の時間を使って自由に学べるチャンスがある。4年生の後期は卒論の作成だけに使うにはもったいない時間である。そこで、この自由な時間を使って「古典」を読むことにしている。それは次のような意味を持っている。

- ① 多くの学問分野に古典といわれるものがあるが、その多くは知ってはいるが読んだことがないものである。大学の授業でも古典を読む機会はほとんどない。
- ② 古典の講読は、当面の学習に関係ない場合が多いために、教養として知っておいた方がよいとは思いつながら、必要に迫られることがないので手が出ない。
- ③ 実際に古典に触れてみると、その価値を実感することができる。これを学生時代にゼミ生にも味わってもらいたい。
- ④ 古典を読むには、時間に余裕があることが望ましい。3年生までは週に10科目近い科目を履修しているため、1つの科目にじっくり取り組むことは難しい。
- ⑤ 4年生の後期にはほとんどの学生が単位を取り終わっているため、時間的に自由である。そこで、特定の本を決めて2年生、3年生のゼミと同じ形式で、毎回、レポーターを決め、質問票を交換し、1時間半をすべて使って議論する。10月から12月の約3か月を掛けて読んでいく。3か月あれば古典を1冊読み終えることができる。

これまで読んだ本の中には、マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、ミル『自由論』、フロム『自由からの逃走』、マルサス『人口論』、バジヨット『ロンバート街』、ヴェブレン『有閑階級の理論』、マンデヴィル『蜂の寓話』などがあり、これ以外にも多くの本を読むことができた。古典はときに冗長な箇所があり、根気よく読む努力が求められるが、読み終わったときの充実感ほまさに古典ならではのものがある。

ゼミの4年生後期で古典を読むメリットがいくつかある。その一つは3年生までのゼミ活動の蓄積が古典を読みこなす力になっているということである。3年生まででは、意識も意欲も、さらには学習の蓄積も不十分であり、古典にじっくりと取り組むことはできなかつたと思う。もう一つは履修科目が少ないことで古典の講読に多くの時間を割けることができるということである。あるゼミ生が「3年生までのように、週10科目以上履修していたら時間的にも無理でした」といっていたが、自由な時間がある4年生の後期が古典を読む絶好の機会である。いつの日か学生時代が充実したものであったと感じることがあるとすれば、その一部がこの古典講読の経験であることを期待している。

2 論文の作成：自主創造の実践

ゼミ活動の中には論文の作成がある。これはゼミ生が自主的に作成するものであるが、論文の作成の過程は、問題発見、問題解析、問題解決の過程である。それは、自ら考え、自ら行動し、自ら結論を導くという意味で文字通り「自主創造」の実践である。

(1) インゼミ論文と大会参加

2年生は商学部でゼミナール連合協議会が主催する論文発表大会である「インゼミ」大会に参加する。大会の開催は12月初旬である。インゼミ大会には論文発表部門とプレゼン部門があり、どちらかに参加することができる。私のゼミは論文発表の部門に参加していた。

ゼミによって専門分野が違うので、その中で専門に近い3～4のゼミナールが1つのチームを作り、6月から7月にかけてテーマ設定会議を開き、共通テーマを決定する。それに従ってそれぞれのゼミが論文を書き、それをお互い交換し合い、それにもとづいてインゼミ大会において討論を行う。たとえば、2014年の第40回の日本大学商学部インゼミ大会における経済部門のテーマは、「日本の雇用問題」であり、これに参加した関谷ゼミの個別テーマは「女性の社会進出について」であった。

テーマが決まると、ゼミ内で何をどのように執筆するかの話し合いがもたれる。夏休みまでにゼミとしての論文のテーマが決まる。テーマにしたがって、夏休みから9月にかけてチーム内で各自の分担を決め資料の収集とその分析が行われる。先行研究も参考にしながら現状分析を行い、ゼミとしての問題提起と対応策を検討する。この間、ゼミの中では仲間と協力しながらも、時には意見の食い違いによる対立も生じる。紆余曲折を経ながらも論文が完成する10月頃にはゼミ生間の絆が深まり、ゼミ内に1つのものを共同で作る協体制が出来上がる。そこには各自が主体性をもって取り組んだ結果として自主創造の喜びがある。

(2) 論文作成に必要な統計処理の習得

論文の作成に関しては、とくに経済問題を扱う場合、問題を解明していく上で分析に関する技術的な問題に直面することがある。それは統計数値の解析である。経済の現状と問題点を説明するためには統計的な検証が必要となる。しかし、商学部の学生は文系であるために受験で数学を選択する学生が少ない。そのため統計処理に関する知識が乏しい。

そこで、2年生のゼミ入室と同時に「ミクロ経済学」、「マクロ経済学」、「経済統計学」の科目を履修するように指導する。それによって、卒業に必要な単位の習得がそのままゼミでの研究活動に役立つことになる。授業でマスターした統計知識は学生時代の論文の作成だけでなく、卒業して企業に就職した後でも役立つことになる。

(3) インゼミ大会

12月に行われるインゼミ大会当日は、この論文をもとにして、午前、午後に渡り参加ゼミによる討論が行われる。ここでは、他のゼミと討論するという通常のゼミではできない経験が可能となる。討論を指導する講師の先生からのコメントもその後のゼミ学習の参考になる。インゼミ大会への参加は、ゼミ生を成長させてくれるだけでなく、苦労して1つのものを作り上げることによりゼミ生間の結びつきも強めてくれる効果がある。

(4) インナー・インター大会への参加

3年生になると関東地方の大学による論文発表大会であるインナー大会か全国的な規模での論文発表であるインター大会への参加がある。これは、他大学のゼミ生と交流する絶好の機会である。両大会とも各部門のテーマに従って論文を書き、当日の発表大会に参加し、他大学のゼミ生たちと専門分野の問題について討論する。論文の作成プロセスについては2年生のインゼミ大会と同様であるが、大きな違いは、他大学の学生と交流することができるということである。こうした大会への参加は、他大学の学生の実力を知ることにより、自分たちのゼミ活動を再確認するとともに普段の活動に自信をもつことにもなる。

たとえば、2010年に行われた第50回のインナー大会での経済部門のテーマは「経済格差」であり、これに参加した関谷ゼミの個別テーマは「現在の日本の所得格差、雇用問題の現状についての今後の展望と見解」であった。

また、関谷ゼミでは、7年間にわたり毎年3年生が同志社大学で開催されているWEST論文研究発表会に参加していた。これは社会の諸問題を学生たちが経済学の視点から研究し、社会に対して政策提言を行うというものである。開催場所が関西であり、事前の打ち合わせや中間報告会を含めて数回にわたり同志社大学に行く必要があるために関東の大学からの参加は2~3校にとどまっておらず、参加校のほとんどは関西および四国、九州の大学である。大学の教員だけでなく、企業の担当者も論文および発表の審査員に加わっており、厳しい審査がなされている。発表のための論文作成も発表会と同様に学生にとってかなり負担であったが、各学年ともそれをやり遂げた。西日本の大学の学生と討論する機会はめったにないので、ゼミ生にと

って貴重な経験であったといえる。

関谷ゼミとして発表した論文のテーマとしては、2013年「高齢者間経済格差是正」、2016年「介護従事者の定着率改善に向けて」、2018年「高齢富裕層の消費促進」などがある。

(5) 卒業論文の作成

4年生になるとゼミ活動の集大成としての卒業論文の作成がある。就職に目途の着く7月から8月に論文のテーマを決め、後期が始まるまでに論文の骨子を固める。夏合宿のときにテーマや章立ての内容について個別に報告してもらいアドバイスする。

9月から11月にかけて資料を作成し、参考文献を読んで論文の下書きをする。それを私が随時添削し、何回かに渡ってそれを繰り返すことで論文を完成させることができる。すでに2年生、3年生で論文作成の経験があるので、形式や文章表現には大きな問題はない。ポイントは、設定したテーマについて説得力のある論文が作成できるかどうかである。とくに、論考の裏付けとなる統計データの妥当性が重要となる。総じて卒論の質は高く、商学部が優秀な卒業論文に与える「優秀論文賞」に応募するゼミ生も多く、受賞者も多く出ている。

(6) 論文作成・発表の効果

課題を設定し、問題の原因を解明し、対策のための方策を提示するために客観的なデータを重視し、それを論理的に解明する作業は、社会に出てからさまざまな仕事の場面で当面する課題の対応と共通する面があると思われる。その意味で、ゼミナールでの論文作成は有効なキャリア教育として役立つと考えられる。

また、論文発表大会において学内だけでなく他大学の学生の前で論文を発表し、討論するという経験がゼミ生を大きく成長させることも実感することができる。

3 サブ・ゼミナール：学生が先生になる

ゼミは、各学年とも公式の授業時間の中で週1回行われているが、ゼミ独自の活動として2年生に対してサブ・ゼミナールの時間を設けている。これは本ゼミの補助的活動として週1回行われるものであり、1年間続けられる。これは学生たちだけのゼミ活動であり、指導は3年生が行う。形式は本ゼミと同じであり、1時間半に渡って発表・討論が行われる。本ゼミと異なるのは、先生が3年生だということである。内容は、日本経済についての基本的なテキストを読むということである。

(1) 学生主導のゼミ活動

このサブ・ゼミの大きな特徴は、学生だけの自主的なゼミ活動であるということと、3年生が先生となって指導するということである。2年生にとっては、本ゼミ以外に経済学の基本的な内容を学ぶ機会であるが、教える3年生にとってもよい経験になる。サブ・ゼミ係は3年生の中から自分たちで2名を選び、その人たちが指導することになる。

3年生にとっては、教える経験を通じて、授業の準備の大変さや指導の難しさを学ぶことができる。テキストは3年生が自分たちで決める。多くの場合、前期で1冊のテキストを読み終えるペースで進むので、年間を通じて2冊のテキストを読むことができる。テキストの内容としては、日本経済の入門といったレベルの本が選ばれる場合が多い。

(2) 自主的活動

これは文字通りゼミ生たちの自主的な活動であり、ゼミが行われる時間も自分たちで相談して都合の良い日を決める。ゼミ活動の進め方もすべて学生に任せてある。大学生活において、実際に学生が学生に教わり、学生が学生に教える機会はほとんどないが、この経験は教育効果の点からも重要であり、それを実現できる点でゼミの存在意義は大きいといえる。

4 ゼミ合宿：自己啓発を促す7つの工夫

ゼミ活動の一環として、春休み、夏休みを利用してゼミの合宿を行っている。東京近県のホテルを利用して2泊3日で寝食をともにしながら学校での通常のゼミとは違う形の活動が実施できる。

(1) 持久力を鍛える

2年生から4年生までの全ゼミ生が一堂に会して、2日間に渡り専門的な分野に関する議論をすることによって、知識の深化と討論の技量を磨くことができる。合宿では3日間で1冊のテキストを読み終えるが、テキストは1か月前に選定して学生に伝える。ゼミ生は合宿までにそれを読み込んでおく。議論の形式は通常のゼミと同じで、事前に質問を出してもらい、それをもとにして当日の議論を進めていく。司会はゼミ長が行う。合宿における学習面でのメリットは、異なる学年の意見を聞くことができることと、学年を超えて議論ができることである。食事の時間以外は討論し続けるために、集中力だけでなく持久力が求められる。

(2) 3分間スピーチ

夏合宿では、2年生を対象にして「3分間スピーチ」を行う。1日目の夕飯後に会場を用意して、2年生に一人ずつ3分間のスピーチしてもらおう。これはゼミ合宿の恒例行事になっている。3年生、4年生はスピーチを聞いて、一人終わるごとに批評する。「声の大きさ」、「話す速度」、「内容のまとまり」、「目線」、「手足の動き」、「口癖」等について真剣に指摘する。

人前でスピーチは社会人になってから必要となるので、その準備も兼ねている。2年生のスピーチが終了した段階で、4年生の中から3人程度が模範となるスピーチを行う。これは2年生にとってゼミでの2年間の経験が4年生をいかに成長させたかを実感できるよい機会となっている。

(3) 5分前行動

合宿が学校でのゼミと異なる点の一つは、生活面での規律ある行動の訓練の場となるということである。ゼミ合宿の基本は「5分前行動」にある。起床、朝食、午前のゼミ開始、昼食、午後のゼミ開始、夕飯等について決められたスケジュールの5分前には準備ができているようにする。この5分前行動は毎回の合宿で徹底するようにしているが、こうした習慣を身に着けると社会に出てから役立つことになると思われる。

(4) 学生間の自由な交流

合宿のもう一つのメリットは、自由時間に先輩、後輩がそれぞれの部屋で気軽に交流できる点にある。ここでは、日常生活の悩みを話し合うことができるし、恋愛談議に花が咲くこともあるそうである。ある春合宿では、就職をまじかに控えた3年生がお互いの長所を指摘し合うといったことをしたこともある。これは自分の良いところを指摘してもらうことで、あらためて自分に自信を持つことができたということであった。これも合宿だからできることである。

(5) やる気を高める表彰

合宿2日目の夜は、夕食の後、簡単な飲み物とお菓子をつまみながら合宿の打ち上げコンパを行っている。ここでは2日間の学習から解放されて楽しい時間を過ごすことができる。かつては、お酒を飲んで盛り上がっていたが、最近ではアルコールを口にすることはなくなった。禁止したわけではないが、自然の流れでそうなったので、時代の変化かと思っている。

コンパでの最大のイベントは、合宿におけるゼミ活動に対する表彰である。基本は学習における活躍が評価の対象となる。とくに討論における発言の回数とその内容である。発言回数が多かったか、下調べが十分であったか、議論に説得力があったか、といった点を中心に評価している。表彰の内容は、「MVP」、「敢闘賞」、「努力賞」、「新人賞」である。4月からゼミが始まるので、夏の合宿では2年生に「新人賞」を準備している。春合宿では新人賞の代わりに「努力賞」が与えられる。賞品はゼミ費から一つ500円から1000円程度の品物が用意されている。

表彰はゼミ生にとってうれしいことであり、賞品以上に自分のやったことが評価されたということに誇りを持ってきている。今回表彰されなかった学生は次回こそはと次の合宿で頑張ることになる。表彰の選定は教員とゼミ長の2人で相談して決めている。

(6) 反省会

合宿の最終日には、あらためて時間をとって学習面と生活面について反省会を行っている。これは合宿を総括するとともに、ホテルの予約から合宿のスケジュール管理まで、すべてを取り仕切ってくれた渉外担当の学生への感謝も込められている。また、反省会は、合宿をきっかけにして長い休み中に生活のリズムが崩れてしまった学生には、規則正しい生活への軌道修正を促す機会ともなる。

(7) 社会的礼儀の実践

合宿でお世話になるホテルへの挨拶もゼミの大切な行事の一つである。ホテルに到着したときに3日間お世話になるので、簡単な手土産を用意し、ゼミ長が中心となって全員でフロントに挨拶する。また、帰りも同じように全員でお世話になった旨の挨拶をする。これは行事を行う場合の社会的な儀礼として経験しておくべきことと考えている。

5 合同ゼミナール：議論を鍛える

ゼミナールは正規の授業であるので、時間割にしたがって学年別に行われる。そのために、学年の垣根を超えて2年生から4年生までが一緒に学習する機会はそれほど多くない。とくに、合宿を別にすれば学習面でゼミの先輩と後輩が交流できる時間は少ない。そこで、毎週のゼミとは別にゼミ生全員が一堂に会してテキストを読み、議論する機会を設けている。それが、「合同ゼミナール」である。

(1) 全学年合同のゼミ活動

課外授業になるが、学校の教室を利用して前期2回、後期2回、土曜日に2年生～4年生まで全学年で合同のゼミを行っている。前期は5月と6月、後期は10月と11月に月1回土曜日の午後1時から5時の時間帯で約4時間に渡って討論が行われる。

合同ゼミでは、毎回テキストを決め、それを読んでいく。テキストは経済に関してそのときに最も話題になっている本を選び、それを半日で読み終える。やり方は通常のゼミと同様に事前に質問票を交換し、各自

が担当章についてレジュメを書いて提出する。ゼミ長が司会者となり、質問票に従って議論を進めていく。各章の議論が終了したところで教員が内容並びに議論の総括を行う。

(2) 合同ゼミのメリット

合同ゼミのメリットの一つは学年が異なる先輩・後輩と一緒に議論できるということである。とくに、2年生は、先輩たちの発言内容や理解度の違いを知ることにより、ゼミにおける1年間および2年間の学習効果がいかに大きいかを認識することができる。また、30人を超える人たちの中で議論することにより、ゼミ生一人一人が人前で自分の意見を述べる勇気を持つことができる。さらに、その時に話題になっている本を読むことができるというメリットもある。

(3) OB・OG・社会人の参加

合同ゼミのもう一つの意義は、土曜日の午後の時間なので、卒業生のゼミOB・OGに参加してもらうことができるということである。卒業生が参加してくれることにより、現役のゼミ生にとっては社会人と議論するまたとない機会となる。

ゼミ終了後に社会人である卒業生から就職に関するアドバイスや学生時代にやっておいた方がよいことなどを聞かせてもらうことができる。また、一般の社会人にも参加してもらうことがあるので、そうした方々から企業や社会に関する話を聞くこともできる。

6 ゼミに期待される教育効果

ゼミナールは科目としては選択科目の一つに過ぎないが、そこから得られる教育効果には大きな可能性がある。

(1) 理解力を高める

毎週の演習時間を通じて専門書の解説を続けることによる理解力の向上と内容の的確な把握である。これは継続的な学習によって養われるものである。3年間のゼミ活動を通じて、学問研究に関する集中力と耐久力も養うこともできる。さらに、ゼミでの学習を通じてのレジュメの作成や論理的な思考の形成は、社会人になって仕事をしていく上で有形・無形の財産となる。

(2) 人前で発言する力

人の前で発言する力を養うことである。ゼミに入室を希望する学生の多くがゼミ活動に期待することは、「人前で話ができるようになりたい」ということである。友達との日常会話と違い、複数の人の前で話することは簡単なことではない。そのためには、あらためて訓練が必要である。多く学生がゼミに求めるのがこの訓練の機会である。ゼミでは毎週の演習だけでなく、合宿、合同ゼミとあらゆる機会に発言が求められる。また、インゼミ大会やインター・インナー大会を通じて報告・議論の機会が与えられる。

実は、こうした経験が大学の卒業を待たずに役立つことになる。それは就職試験の面接である。多くのゼミ生が就職の面接を通じてゼミに入っていてよかったと実感することができる。

(3) 先輩・後輩との交流

同期だけでなく、先輩、後輩との交流が人との付き合い方の幅を広げてくれる。とくに、先輩として後輩

のゼミ生を指導し、ゼミ活動を運営する経験は社会に出てからも役立つと思われる。年1回開催されるゼミのOB・OG会では、年代を超えた交流も可能となる。

(4) 大学での居場所

ゼミに限ったことではないが、学校の中に自分の居場所を作ることができるということである。通常の授業だけでは、授業が終れば自分がそこに存在したという実感を持つことは難しい。ゼミでの3年間は学校の中に自分の居場所が存在したことを実感することができるために、ここが自分の大学であることを認識することができる。それにより、大学への帰属意識を高めることができるので、卒業してからも母校という意識を持つことができる。また、卒業後も同期を中心にして大学時代の交流が続くために、人生を豊かにする一つの糧とすることができる。

7 勉強の3つのコツ

セミナーの活動には学生の積極的な参加を促すようなさまざまな仕掛けがなされているが、学生が活発なゼミ活動を展開するために最も必要なことは、事前の準備である予習をしっかりと行うということである。それは自宅ないしは図書館での勉強を意味する。

いったんゼミ活動が軌道に乗れば勉強の習慣もついてくるので、それなりに継続して学習することができるが、ゼミ生といえども勉強が好きだというわけではない。日常生活の中では他にやりたいことも山ほどある。アルバイトや友人との付き合いもあり、時間が余っているわけではない。それゆえ、勉強のための時間は効率的に使う必要がある。

勉強を効率的に行うために役立つちょっとしたコツがある。これはゼミの時間にゼミ生に伝えてきたものである。

(1) すぐやる

勉強時間の無駄を省くコツの一つは、「すぐやる」ということである。一般に時間がかかる割に勉強が捗らないのは、始めるのがおっくうなためにいつまでもぐずぐずして多くの時間を無駄にするからである。学校から帰り、自分の部屋に入って机に向かってもすぐに教科書が開けない。まずはスマホを手に取り、メールを確認し、返事を出したり、動画を見たりする。好きな小説を読むこともある。そのうち夕飯の時間になる。夕飯が終わっても好きなテレビがあれば1時間、2時間はあっという間に過ぎる。そのうち、今日はやめて明日頑張ろうということでその夜はなにもしないで終わることになるが、次の日も同じことが繰り返される。

誰でもいやなことを始めるのは大変であるが、まずその大変さを振り払うことが肝心である。そのコツは、何も考えずに教科書を開き、ノートに今日勉強する項目を書き入れることである。そうすればとりあえず始めることができる。いやだと思っていたことでも始めればそれなりにできるのである。少し前に流行った「いつやるのか?」「今でしょ!」これがコツである。何も考えずにすぐ始める。これが時間を効率的に使うコツである。

(2) 自分に聞かない

2つ目のコツは、勉強を始めるときに、今、勉強するかどうかを自分に聞かないことである。自分に聞けば、できない理由がいくらかでも出てくる。友達へのメールが先、授業で疲れている、風邪気味で頭が痛い、お腹

が空いている。それらをいちいち聞いていたのでは勉強できるはずがない。用事が済んだら後でやると言ってやったためしはない。ゼミ合宿の反省会で、今回は十分にテキストを読み込めなかったのが、家に帰ったら読み返したいという学生がいるが、実行したかどうかわからない。

なぜ自分に聞いてはダメなのか。それは自分に聞くと、その時の気分で答えるからである。気分ほど当てにならないものはない。ときには夜中まで勉強する気になっていたのに、次の日にはそれが嘘のように消えている。気分とはそのようなものである。ゆえに、その時の自分に聞いていたのでは、いつまでたっても勉強は手につかない。勉強しようと思ったら、目標を決め、計画を立て、それにしたがってすぐに実行することである。

ついであるが、やる気さえ出れば頑張れるのと思っている人は、順番を間違えている。やる気は一生懸命勉強すると出てくるのである。頑張らないのに自然とやる気が出てくることはない。だから、やる気を待っていたのではいつまでたってもできない。挙句の果てにはできない言い訳として、時間がなかったということになる。やる気は頑張っていると出てくるのである。そうすると、いろいろなことが無理なくできるようになる。それが一層やる気を掻き立てるので、さらに積極的に取り組むことができる。まさに、やる気はまじめに努力する人に与えられる報酬である。ゼミ生が上級生になるにしたがってゼミでの学習に積極的に取り組むようになるのを見る時、まさにこれを実感することができる。

(3) いつでも本格的にやる

3つ目のコツは、とりあえず大まかにやっておいて、後できちんと整理するというやり方をしないということである。今は仮にやっておいて後で本格的にやるという後でやった人はいない。そもそも今と後で同じことを二重にやるのは時間の無駄である。しかも、仮にやったことはほとんど何も頭に残らないので、後でやる時には初めからやり直さないといけない。それは大変な労力である。それにもかかわらず、多くの人が後でやる方を選択する。それは今きちんとやるのが面倒くさいからである。この癖を改める決心が勉強を捗らせる上で不可欠である。

1回の勉強に使える時間には限りがあるので、そのときにやれることは僅かであるとしても、それをきちんとやっておけば次にはそこから先に進むことができる。これが積み重なると、小さな一歩が大きな成果を生むことになる。仮にやっておくと、次に始める時にはまた初めからやらなければならない。これでは先に進むことができない。勉強はいつでも本格的にやる。これが時間を効率的に使うための3つ目のコツである。

ここに挙げた3つのコツを実行するのに特別な能力はいらない。誰でもすぐにできる。ちょっとしたコツを掴んで実践すれば少しは楽に勉強できるのである。

おわりに

ここに記した「ゼミ教育の実践報告」は、日本大学商学部において1978年に「現代経済学」のゼミを開設して以来、2021年3月に定年退職するまでの43年間に渡るゼミ活動でゼミ生とともに築いてきたことが基になっている。

本ゼミを主体としながら、さまざまな活動を行ってきたが、その目的は学生の潜在能力の活性化である。それを実現するためにいくつかの仕掛けを作り実践してきたが、それらが軌道に乗るまでにはそれなりの時間がかかっている。はじめからすべてがあったわけではない。その時の学生と相談しながら、少しずつ時間をかけて活性化に向けた仕掛けを作ってきた。

ここに記したゼミ活動は、それをすべて実現しようとする学生にはかなりハードであると思われる。しかし、さまざまな仕掛けや工夫もいったん導入できると、それが後輩に引き継がれやがてゼミの伝統になる。そうした活動が軌道に乗ると、そこに好循環が始まり先輩、後輩が協力し合うことにより、やがて日常的な活動になる。こうしたゼミ活動から感じることは、日本大学の学生の潜在能力の高さである。ゼミはまさにこの潜在能力の顕在化のためにあるといえる。

ゼミ活動の活性化のカギは、議論のための質問を事前に準備するということであるが、実は、学生が準備する質問票の中には見当はずれのものも少なくはない。しかし、それを逐一指摘することはしない。まずは学生の質問を受け入れて、それに従って議論し、総括のときにもっと議論すべきことがあったのではないかと述べるにとどめておく。

学生も毎週テキストを読んで質問を出すのは大変である。サブ・ゼミや合同ゼミが重なるときもある。そこにインゼミ大会の論文の準備が加わる場合もある。それ以外にも、サークル活動、アルバイトなどがある。

そうすると、じっくりテキストを読んで質問を考える余裕がなくなる。そうしたことも考慮するとき、必要なことは学生を信頼して「待つてあげる」ということである。見当はずれな質問や答えに対しても、手を抜いていると受け取らず、事情を察してやる必要がある。ゼミ生の中には短い時間で成長する者もいるが、進歩するのに時間がかかる学生もいる。場合によってはゼミでの経験が卒業後に役立つこともある。「成長を待つ」ことも教育の一つである。

「大学時代に勉強した方がよい」といわれるが、文系の学生は特定の資格試験を除けば、大学時代に何を勉強したらよいのかわからない場合が多い。文系の場合、これを学んでおけばよいという科目があるわけではない。ただ、共通していえることは、それが何であったとしても、研究対象に関して問題発見、分析、検討を通じて基礎的な学力を養うとともに、それを適切に発表する能力を養うことが重要であると思われる。これが社会に出てから役立つ基礎学力となる。それを具体的な形で可能にするのがゼミナールの力である。

いずれにしても、教育を通じて養った力は社会に出てからどこかで、何らかの形で役立つものである。その際言えることの一つは、教えたことの効果をすぐに確認しようとする逆効果になる場合が多いということであろう。それだけに、教育の場では、目の前の学生を信頼し、長い目で見ながら可能な限り良質な教育を行うことが大切であると思われる。